

澤村教授の逝去 去五月二十三日午後八時

五十三分豫て療養中なりし本會委員澤村專太郎氏逝去さる。氏の東洋美術研究に對する深き熱意と博き造詣は、人の齊しく敬畏するところなりしにもかゝわらず、天君に齡を假さず、知命に致らずして已に白玉樓中の人と成られし事、氏のため又學界のために惜しみても餘りあることである。先に本會講演に際して「印度中世紀に於ける繪畫の史的考察」の題下、懇切なる教示を賜はりしこと、今茲に顧みて轉た感慨なき能はず、側愴衣を披て露尙寒きを憶ふ。

故澤村專太郎教授略歴並業績

- 明治十七年一月 一日滋賀縣彦根町にて澤村傳次郎氏長男として出生。
- 同二十三年四月 彦根小學校入學。
- 同三十一年三月 同校卒業。
- 同 四月 滋賀縣立第一中學入學。
- 同三十六年三月 同校卒業。
- 同 九月 第三高等學校第一部入學。
- 同三十九年七月 同校卒業。在學中雜誌部員として活躍し、多數の校歌、詩歌を發表す。
- 同 九月 京都帝國文科大學哲學科へ入學し、美學美術史を專攻す。
- 同 同 専門寮英語科教授を囑託せらる。
- 同 同 同 詩集「湖畔の悲歌」を京都文港堂より出版。
- 同四十二年七月 卒業。
- 同 九月 東京帝國大學院に入學し、近世美術史を專攻す
- 同 同 國華社に入社、「國華」の編輯を擔當す。
- 同 同 「古代歌謡の形式」(新小説)
- 同 十月 「類焼後」(詩)(帝國文學)
- 同 同 「蕪村論」(一)(國華)
- 同 十一月 「蕪村論」(二)(國華)

同	十二月	「蕪村論」(三)(國華)	同	四月	「平安時代の高僧畫像に就て」(國華)
同	同四十二年一月	「女性と色彩の觀念」(女子文壇)	同	五月	「朝鮮古墳發見の壁畫」(國華)
同	三月	「蕪村論」(四)(國華)	同	七月	「本邦に於ける初期の洋畫」(國華)
同	五月	「近世日本美術の曙光」(國華)	同	九月	「東京女子高等師範學校講師囑託を解かる。」
同	十月	「繪卷物に現出せる山水を論ず」(上)(國華)	同	十一月	「避難の途にある日本畫」(中央公論)
同	十一月	「繪卷物に現出せる山水を論ず」(下)(國華)	同	同三年二月	「本邦に於ける白描畫に就て」(上)(國華)
同	同	「第四十三回文部省美術展覽會」(國華)	同	同三月	「本邦に於ける白描畫に就て」(下)(國華)
同	同四十四年一月	「本邦肖像畫に及ぼせる宋畫の感化」(國華)	同	同	「東京女子高等師範學校講師を囑託せらる。」
同	五月	「屏風と日本畫」(女子文壇)	同	同九月	「東京帝國大學大學院を退く。」
同	九月	「神護寺の山水屏風に就て」(國華)	同	同四年三月	「春日曼茶羅說」(上)(國華)
同	十月	「東京美術學校講師を囑託せられ、美學を講ず。」	同	同四月	「印刷局美學講習事務を囑託せらる。」
同	同四十五年二月	「壁畫の話」(續)(前回は不詳)(女子文壇)	同	同五月	「春日曼茶羅說」(下)(國華)
同	同	「本邦近世の障壁畫に就て」(國華)	同	同十月	「文展日本畫評」(東京朝日)
同	三月	「洋畫家の日本畫」(東京朝日)	同	同十一月	「大正の美術界に於ける諸問題」(新日本)
大正元年八月	同	「東京女子高等師範學校講師を囑託せらる。」	同	同十二月	「最近に於ける日本畫の傾向」(新日本)
同	九月	「中世の歌道と歌仙畫に就て」(國華)	同	同	「本邦畫場に及ぼせる西洋版畫の感化」(上)(國華)
同	十一月	「美と法式」(插花俱樂部)	同	同	「本邦畫場に及ぼせる西洋版畫の感化」(下)(國華)
同	同	「廣業と大觀」(中央公論)	同	同五年一月	「本邦畫場に及ぼせる西洋版畫の感化」(下)(國華)
同	同	「第六回公設展覽會の日本畫」(國華)	同	同七月	「印刷局美學講習事務の囑託を解かる。」
同	同	「日本畫各流派のお話」(新世界)	同	同九月	「鑑別峻嚴なる院展を評す」(東京時事)
同	同二年一月	「沈南蘋と其畫風の傳播」(國華)	同	同十月	「幕末の一洋畫家と其渡海日記」(新日本)
同	二月	「東大寺再造營と來朝の宋工に就て」(國華)	同	同	「彼等の進んで來た路」(中央公論)
同	三月	「插花と色彩」(插花俱樂部)	同	同	

同	同	「文展の日本畫」(時事新報)	同	同	大阪市美術館設立顧問を囑託せらる。
同	十一月	「院展日本畫所感」(太陽)	同	同	「アジヤンター石窟寺に於ける彫刻」(四)(國華)
同	同	「日本畫の人物描寫の問題」(中央美術)	同	同(或は六月?)	「大和繪の自然描寫」(大阪主潮社講演)
同	十二月	「西印度ガートトカツチ窟院に就て」(中)(國華)	同	六月	「アジヤンター石窟寺に於ける彫刻」(五)(國華)
同	同	「國畫創作協會覽展會所感」(太陽)	同	八月	「繪卷物に於ける自然描寫」(京都繪事講演)
同	八年二月	「西印度ガートトカツチ窟院に就て」(下)(國華)	同	同	「日本畫の歐化運動」(談)(大阪時事)
同	四月	大阪朝日新聞社に於て、アジヤンタ壁畫模寫及び拓本展覽會。「アジヤンタ藝術の價值」(講演)	同	十月	叙從七位。
同	同	「畫僧周位に就て」(國華)	同	同	「祇園精舎の遺址」(大阪朝日)
同	五月	東京高等師範學校美術史講師を囑託せらる。	同	同	「印度の現在と日本」(大阪朝日神戸附録主催篠山記念講演會)
同	八月	京都帝國大學助教に任ぜらる。	同	十一月	畫家多田三郎、勝田哲兩氏を指導して宇治平等院鳳凰堂壁畫模寫着手。
同	同	陞叙高等官七等。	同	同	「最近日本畫の風潮に就て」(大阪朝日京都支局及京都圖書手工研究會主催美術講演會)
同	同	「アジヤンター石窟寺に於ける彫刻」(一)(國華)	同	同	「日本の近代畫に於ける寫實問題」(大阪時事)
同	同	「東山時代の別字工彌次郎に就いて」(國華)	同	同	「康樂寺流の畫家に就て」(上)(國華)
同	九月	東京美術學校講師解職。	同	十二月	「最近日本畫の風潮」(大阪朝日京都附録)
同	同	京都に赴任。	同	同	「緬甸寺塔の古壁畫」(京都日出)
同	同	「アジヤンター石窟寺に於ける彫刻」(二)(國華)	同	同	鳳凰堂壁畫一部完成。
同	十二月	「アジヤンター石窟寺に於ける彫刻」(三)(國華)	同	同	勝田哲氏を指導して平泉中尊寺金色堂圓柱十二光佛模寫。
同	同	「秣菟羅の都」(大阪朝日)	同	同	「色彩の精神的價值」(舞鶴地方婦人聯合大會講演)
同	同	「尉遲派の繪畫に就て」(美術寫真畫集)	同	同	
同	二月	「尉遲派の繪畫に就て」(美術寫真畫集)	同	同	
同	四月	浄土宗本派教育顧問を囑託せらる。	同	同	
同	同	浄土宗西山専門學校講義を囑託せらる。	同	同	
同	五月	奈良女子高等師範學校講師を囑託せらる。	同	同	

故澤村專太郎教授略歴並業績

同	四月	佛教大學講師を囑託せらる。	同	同	「シーギリヤの壁畫(表現)」
同	同	金色堂模寫一部完成。	同	同	「日本畫の新運動」(大阪週刊朝日)
同	同	「康樂寺流の畫家に就て」(中)(國華)	同	五月	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(四)(國華)
同	同	「祇園精舍の遺址」(大阪朝日)	同	六月	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(五)(國華)
同	五月	高野山へ出張。古美術品調査。	同	同	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(六)(國華)
同	同	「康樂寺流の畫家に就て」(下)(國華)	同	同	「立川流の近代彫刻」(大阪朝日)
同	七月	「西印度ナーションックに於けるゴータミープトラ窟に就て」(上)(史林)	同	同	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(六)
同	八月	植中直齋氏を指導して中尊寺金色堂圓柱模寫。盛岡へ出張し古美術品調査。	同	七月	「西印度ナーションックに於けるゴータミープトラに就て」(下)(史林)
同	九月	陸叙高等官六等。	同	同	「佛教に於ける如來相好の手相に就て」(京都繪專講演會)
同	十月	叙正七位	同	同	「夏の旅の追憶から中尊寺の夜」(大阪週刊朝日夏季特別號)
同	同	「西印度ナーションックに於けるゴータミープトラ窟に就て」(中)(史林)	同	同	「歡喜光寺の一遍上人繪傳」(中央美術)
同	同	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(一)(國華)	同	九月	「佛教と國民生活との關係は其當時の美術が如何に説明してゐる」(談)(信濃毎日)
同	十一月	勝田哲氏を指導して、日野法界寺壁畫模寫作成。	同	十一月	「立川流の近代彫刻」(大阪朝日)
同	同	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(二)(國華)	同	十二月一月	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(六)
同	同	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(三)(國華)	同	二月	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(六)(國華)
同	十二年四月	勝田哲氏をして富貴寺壁畫模寫を作製せしむ。	同	三月	美術史研究の爲め、滿二年間支那、佛蘭西及亞米利加合衆國へ在留を命ぜらる。月末渡支。
同	同	「アツヤンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(三)(國華)	同	同	龍谷大學講師休職。

同	同	歐米各國宗教教育調査を囑託せらる。(淨土宗西山光明寺派本山)	同	同	陸叙高等官五等
同	同	「アジャンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(七)	同	同	埃及國在留を追加さる。(文部省)
同	同	(國華)	同	同	叙從六位
同	同	「アジャンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(八)	同	同	英國倫敦、佛國巴里、獨國柏林に在る中央亞細亞の壁畫に關する調査を囑託せらる。(文部省)
同	同	(國華)	同	同	倫敦一書店にて世界的に珍重すべき貝葉の梵本經典を發見。
同	同	「アジャンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(九)	同	同	倫敦、巴里等を中心に各地を旅行。
同	同	(國華)	同	十四年	九日歸朝。
同	同	「支那に對する感想」(北京週報)	同	十五年一月	教授指導の燉煌及び中央亞細亞發見繪畫の模本完成。
同	同	「東洋美術の精神」(北京週報、北京大學講演筆記)	同	同	
同	同	八月「支那の佛教美術」(北京週報、北京夜學會講演大要)	同	五月	「中央亞細亞出土の唐朝風俗畫」(佛教美術)
同	同	「佛の八十種好に就て」(京大夏季講習會講演)	同	同	「北邙の塵」(大阪朝日)
同	同	九月「支那の佛教美術」(北京週報、北京夜學會講演筆記)	同	七月	「少林寺の古塔群」(上)(佛教美術)
同	同	「支那工藝界の前途」(日刊新支那)	同	八月	信濃諏訪町へ出張。諏訪教育會講習及び古美術調査。
同	同	十月「支那より渡歐」	同	同	「印度の佛教藝術を代表するアジャンター石窟寺の遺蹟」(京都恩賜博物館講演)
同	同	十三年六月	同	十一月	「少林寺の古塔群」(下)(佛教美術)
同	同	東京、京都兩帝大及び東京帝室博物館の事業たる英國、スウェーデン、佛國ペリオ兩氏支那燉煌石窟寺發見の繪畫、及び獨國グリニウエーデル、ル・コック兩氏中央亞細亞發見の繪畫の模本を長谷川路可氏を指導して複製齎手。	同	同	大阪市立美術館設立に關する調査事務囑託を解く。
同	同		同	同	「印度中世紀に於ける繪畫の史的考察」(京大哲學會講演會)

